

## 新型コロナウイルス感染症がもたらす 変化にどう対応していくか

二〇二一年二月九日、第九回宗門教学会議がオンラインにて開催されました。本号は、後半（前半は、『宗報』八月号に掲載）として、全体討議の内容を報告いたします。

今回のテーマは、「新型コロナウイルス感染症がもたらす変化にどう対応していくか」です。

新型コロナウイルスの感染症拡大（以下、新型コロナ拡大）によって、社会のあり方が現在進行形で急速に変化しています。教育機関は長期にわたる休校を余儀なくされ、休校措置が解除された後も分散登校、オンライン授業などの対応策がとられています。ビジネスの世界においても、時差出勤、テレワークなど、人との接触を極力減らす行動が進められています。この人と人が接することを避ける生活様式、情報通信技術に大きく依存した学習形態や働き方、生活様式は、私たちの社会を、今後大きく変化させると予想されています。

新型コロナ拡大による「変化」の特徴は、「スピード」です。世界中に急速に蔓延したスピード、生活様式を変化させるスピードに、今回の感染症の特徴の一つがあり、世界中が急速な変化を受け入れざるを得なくなっています。こうした「急激で強制的な社会の変化」がどのような影響を与え、それに対してどのように応えていくべきかを考えるため、「新型コロナウイルス感染症がもたらす変化にどう対応していくか」をテーマとして開催しました。

第九回宗門教学会議では、会議委員として本願寺派司教の松尾宣昭氏、同志社大学神学部教授の小原克博氏、東京工業大学科学技術創成研究院未来の人類研究センター／リベラルアーツ研究教育院准教授の伊藤亜紗氏、勸学寮頭の徳永一道氏をお招きしました。座長は、浄土真宗本願寺派総合研究所長丘山願海、司会は、浄土真宗本願寺派総合研究所副所長の満井秀城が務めました。

○満井 それでは、最初は松尾先生のご発題につきまして、小原先生からお願いいたします。

○小原 二点ご質問させていただきま

まず、一点は「一緒性」についてです。「一緒性」というものは、それほど失われていないというお話でしたが、一対一とか、一対複数での、特に月参りなどのまめな努力があるため、「一緒性」が保持されていると考えていいのでしょうか。あるいは、浄土真宗に関わっている方々はコロナもあるけれども、そんなに変わっていないという感覚を他の方々も同じようにお持ちなのでしょうか。

もう一つは、教えに関することで、一般的には仏教の多くの宗派がコロナ収束のために「祈り」をしており、YouTubeにもたくさんあがっているというご報告がありました。そういう中であって、浄土真宗では祈禱しないという教えです。なぜなら、それは弥陀の本願にならな

くないからだという、非常にはつきりとした理由があります。そのとき、教えと門信徒の受け止め方との間にギャップがあることを考える必要があると思います。

キリスト教でも繰り返し問われてきているのですが、本来、教えというのは、行いに縛られがちな人間を解放するような力であるはずですが。しかし、例えば浄土真宗に関わっている限りは祈りに近いようなことを、ちよつと口にするだけでも、それは間違っているというかたちで、恐れながら日常を送らなければなら

ないとなってしまうと、やはり、本当にそれが人を自由にする、さとりに向かわせる力ではなくて、逆な作用に及ぶことがあると思います。

教えとしては非常に明快なんですけれども、一般の門信徒の方に受け止めてもらうときに、丁寧な説明の仕方が必要だと思います。そこで、何かそのあたりで普段工夫されていることがありましたら、教えてください。

○松尾 ありがとうございます。まず、私がおります富山は、月参りを厳格に行っている地域と言っていると思います

### 松尾宣昭氏

#### 【略歴】

一九六二年生まれ。浄土真宗本願寺派順正寺住職、本願寺派司教、龍谷大学元教授。専門は宗乗論題における外題の研究。著書に、『仏教はなにを問題としているのか』（永田文昌堂、二〇一五）、『浄土真要鈔講読』（永田文昌堂、二〇一六）、『人間・歴史・仏教の研究』（共著、永田文昌堂、二〇一一）、『親鸞と人間』（共著、永田文昌堂、二〇〇二）、『教行信証』に問う』（共著、永田文昌堂、二〇〇一）など。

す。「まめな努力」という以前に、住職が毎日当然おこなうべき仕事になっているわけです。従って、「一緒性」にはそれほど大きな変化はないという感覚は、地元の多くの住職方の実感であろうと推測します。そしてこれは少し前の調査になりますが(『第十回 宗勢基本調査報告書』四十二頁)、地域ごとの月参りの実施率をみるかぎり、実施率が八割を超えている教区が全国三十二教区のうち九つあります。九つでは一般的とは言えないかもしれませんが、富山だけの話ではないということは言えるでしょう。

次に、これは本当に悩ましいところであります。親鸞聖人は、コロナ問題が早く収束してほしいとか、争い事ができるだけなくなしてほしいとか、そういう人間の自然の思いは決して否定しておられない。それどころか、むしろそれを「世のなか安穏なれ」と「おぼしめすべし(願え)」とさえおっしゃっています(『親鸞聖人御消息』第二五通、『註釈版聖典』

七八四頁)。しかもその願いを「世のいのり」という言葉で言い表しておられます(同右)。ですので、そういう願いを持たれることはとても自然なことなんです。私もそうだし、みんなそうだし、というところは押さえておかなければいけません。

その上で「浄土真宗はコロナ収束の祈りはしないんですよ」ということは、やはり折にふれてお伝えしなければなりません。そのことが取りも直さず浄土真宗の独自性、本願のこころを伝えることになるからです。

聖人の「世のなか安穏なれ」は「仏法ひろまれ」と一体です。安穏になればよしというのではなく、一人ひとりが仏となる道を歩むためにこそ、世の安穏が願われるのです。そして仏となることは自己中心性がゼロとなった存在となることです。ところが私たちが祈祷によって願う安穏は、結局は自己中心的・人間中心的な安穏でしょう。生きとし生けるものす

べてが安穏でありますようにと気分ですることはあっても、自分の身内がコロナに感染しないでほしいという切実な願いと対比すれば、その違いはあざやかに浮かび上がるはずです。ですから、私たちすべてを浄土往生によって自己中心性ゼロの存在とする誓われた阿弥陀さまが、自己中心性に基づく祈祷を聞き入れられるはずがない。だから本願にはこの世の災厄をなくしてやるとも誓われてないし、祈れば応えてやるとも誓われてない。この基本ラインはぜひともお伝えしていかなばならないと思います。

もちろん、今言ったような言葉をただ口に出しても、何も伝わりません。ご質問にあった伝える上での工夫と言えるようなものは特になく、そのつどの相手の状況に応じて、言葉を選んで、一方向的ではなく、できれば対話を通して、お伝えしていかなければという、自戒くらいはあります。

○満井 松尾先生と小原先生とのやりと

りに関わって、伊藤先生からコメントがあれば、お願いいたします。

○伊藤 最初にお話しくださった月参りということがすごく面白いなと思いました。というのは、私は今回の新型コロナウイルスの状況下で、ルーティンとか定期開催というものの重要性が増しているように思っているからです。

もう一つは、門徒さんとお話ししているときに、違和感を表明されるということがすごく興味深いなと思いました。そのとき、違和感を表明するときの人格、つまり、人間としてそれは違うんじゃないかとおっしゃるのか。それとも、阿弥陀さまの教えをよくわかっている専門家として相対するのかわかりませんが、気になっていきます。門徒さんからするとどちらの役割を期待しているんだろうというのがすごく気になった点です。

○松尾 それは門徒さんによって違います。さすがに「弥陀の代官」のような存在として見られることはありませんが、

法衣を着けておりますので、一種の「専門家」としての言葉を期待しておられる方は多いと思います。もともと、相手に批判的なことを言ったとたんに、単なる個人的意見としてあしらわれることが多いように感じますが、一概には言えません。

○満井 引き続き、小原先生のご発題に関わりまして、まず、伊藤先生からご質問、あるいはコメント等ございましたら、お願いいたします。

○伊藤 最初に、共感という問題をどう

考えるかというのとはとても重要な問題だと思います。先生のお話の中に、集団内の共感がネットのコミュニケーションなどを通して強化されるという話がありました。そういう共感、ないし感情一般ということに対して、どういうふうに考えたいかということをもう少し伺いたいなと思いました。

もう一点は、因果ではなくて偶然ということを、どういうふうに宗教で考えて

## 小原克博氏

### 【略歴】

一九六五年生まれ。博士（神学）。同志社大学神学部教授。神学部長・神学研究科長。同志社大学良心学研究センターセンター長。専門は、キリスト教思想、宗教倫理学、一神教研究。先端医療、環境問題、性差別などをめぐる倫理的課題や、宗教と政治の関係、および、一神教に焦点を当てた文明論、戦争論に取り組む。著書に、『宗教は現代人を救えるか―仏教の視点、キリスト教の思考』（共著、平凡社、二〇二〇）、龍谷大学アジア仏教文化研究叢書『国際社会と日本仏教』（分担執筆、丸善出版、二〇二〇）、『人類の起源、宗教の誕生…ホモ・サピエンスの「信じる心」が生まれたとき』（共著、平凡社、二〇一九）など。

いるのかということを知りたいなと思いましたが、

○小原 いずれも非常に重要な点です。で、さらに説明を加えたいと思います。

まず、共感とは人間関係を維持するうえで大事なものです。しかし、共感が暴走する場合があります。特に、グループ内における共感の暴走は、アメリカだけではなく、世界的な問題になっていると思います。私の専門分野で言いますと、宗教研究にとつての近年の大きな問題は、各地で起こっているテロです。

新型コロナウイルス感染症が拡大する中で、シリアで起こっていること、ISのことなどは、関心が薄らいでいるようですけれども、今またISが復活しつつあります。中東の近辺の人たちだけではなく、アメリカ、ヨーロッパ、アジアで若い人たちがISの呼び掛けに共感しているという実態があります。ですから、人の共感というものは、たやすく操作され、悪用されるという可能性があるとい

上、そういったことをいかにすれば抑止できるのかを解明する、共感の研究が必要だと思っています。

人が人を助けるときの、まさにその人の立場になって考えるときも、共感が働いているわけですから、共感が持つポジティブな面とネガティブな面の両面を見ていく必要があります。そのための材料を、宗教の歴史は多数提供してくれます。

それから因果に関してですが、これは科学の世界にとつて非常に大事だと思います。セレンディピティ (serendipity) という英語があります。例えば、実験をしていて、失敗をしたけれども、その失敗を通じて偶然発見したことから、新しい科学的発見が生じたといったことが、科学の歴史にはたくさんあります。ですから、自分が予想していないことに遭遇したときに、そこから何を導くかということは、科学の進歩にとつて重要です。宗教にとつても重要です。

人間は日常のルーティンの中で、自分を制御したり、推測したりしますが、ルーティンな日常を超えた偶然にさらされる時、人は日常を超えた非日常の視点が開かれていくわけです。つまり、違う世界へと目が開かれていくためには、何か偶然の出会いみたいなものが必要だということです。それは人によっては超越的な他者との出会いなのかもしれません。

○満井 ありがとうございます。寮頭和上、一言いかがでございますか。

○徳永 私が専攻する浄土真宗の宗学では長い間、「いのり」という言葉は禁句のような扱いをされてきました。だから、年賀状には「皆さまのご多幸をお祈り申しあげます」とは、絶対に書きません。

ところが親鸞聖人は「世のいのり」という言葉を使っている。「世のいのり」ここにいられて」と『御消息』(『親鸞聖人御消息』第二五通、『註釈版聖典』七八四



頁)にあるわけで、これをどのように宗学の中に位置付けていくか。特に今の「コロナの時代」、この新型コロナウイルス感染症が収束することを私が祈ってはいけないのかという疑問を、浄土真宗の人ならば必ず持っていると思いますね。それをどのように宗学的に整理して、位置付けていくかというのが、私どものこれからの仕事だと、今日はつくづく感じさせられましたね。

○満井 次は伊藤先生のご発題に関わって質問が出ております。葬儀なら葬儀、

法事なら法事という儀式、儀礼空間を五感的に共有するということについて、どうお考えでしょうか。伊藤先生、お願いいたします。

○伊藤 触覚のことを考えていて、すごく面白いのは、必ずしも直接的な触覚が重要というわけではないということですね。例えば、ロープという間接的な接触にした方が、お互い生成的なコミュニケーションができるようになるんです。そのとき、人と人が直接関わらない。間接化するための仕組みというのは、必ず

## 伊藤亜紗氏

### 【略歴】

一九七九年生まれ。東京工業大学科学技術創成研究院未来の人類研究センター／リベラルアーツ研究教育院准教授。MIT客員研究員(二〇一九、三―八)。専門は、美学、現代アート。障害を通して、人間の身体のある方を研究している。東京工業大学での「脱コロナ禍研究プロジェクト」において、ポストコロナ社会における人間のあり方と利他を研究している。著書に、『記憶する体』(春秋社、二〇一九)、『目の見えないアスリートの身体論』(潮出版社、二〇一六)、『目の見えない人は世界をどう見ているのか』(光文社、二〇一五)など。

### 接触を可能にする信頼

・GPSを持たされている学生  
→安心と信頼は違う

信頼は社会的不確実性が存在しているにもかかわらず、相手の（自分に対する感情までも含めた意味での）人間性ゆえに、相手が自分に対してひどい行動はとらないだろうと考えることです。これに対して安心は、そもそもそのような社会的不確実性が存在していないと感じることを意味します。  
（山岸俊男「安心社会から信頼社会へ」）



不確実性

存在していないと感じる → **安心=管理**

自覚しているけど大丈夫な方に賭ける → **信頼=任せる**

しもロープでなくてもいいんだと思います。棒でも、テーブルでも、建築空間でもいいかもしれません。そうやって拡張していくと、儀礼的な空間というものも、何かロープ的な役割を果たし得ると思います。

○満井 伊藤先生のご発題に関して松尾先生から質問、あるいはコメントを願いました。

○松尾 浄土真宗の信心は、安心あんじんとも言います。こころを安置するという意味です。すべてを阿弥陀さまにあずけて安心しきっている。すべて任せてしまっているという意味合いでも安心というふうに言っています。

そこで、お尋ねですけれども、伊藤先生の資料に「不確実性」という言葉から安心・信頼に対して二つの矢印を出されています。また、「安心=管理」と並べてあります。こうした点についてお教えいただけますでしょうか。

○伊藤 ここで私がお話しした社会心理学における安心は、ニュアンスが違うのかもしれない。安心と信頼は、おそらく円環構造になって、信頼の果てに安心がやって来て、ということがあると思います。しかし、決定的に違うのは、自分と他者の違いをどこまで意識しているの

かということだと思います。安心のときには、その差が意識されていません。自分の思った通り、この人が動いているというのが、社会心理学的な安心だと思えます。それに対して、信頼というのは、この人のことがわからない。どういう行動をするか推測できないけれども任せるということ、そこが違いだと思います。

○小原 不確実性のところから安心、信頼、二通りの違う道があるということでした。表現は違うのですけれども、私もほとんど同じことを言おうとしていました。

例えば、現代では、われわれ全員がGPSを持たされているような社会に生きているわけです。それを国家の視点から見て、国家の側が安心したいと思えば、徹底した監視、管理ツールとして使うでしょう。その反対に、そういったガバナンスを私たちは好まないという社会では、徹底した管理とか監視とは違う社

会のあり方を模索しなければならぬと思います。ですから、安心と信頼は、明瞭に分かれているわけではなくて、絶えずくつついたり分かれたりするような中で、われわれは道を選んでいるので、やはり監視された中で安心社会で本当にいいのかどうかということを、自分への問いとして突き付ける必要があると思います。

また、今の管理社会と監視社会は、個人の独立性より全体的な秩序を重んじています。全体的なセキュリティをより尊重するような方向へと科学技術が後押ししていくような傾向が強くなると思います。そういう中であって、私の生き方は私自身が決めていると言いきれるような余白を、どうやってつくっていくかということが大事だと思っています。

浄土真宗の独自性ということを松尾先生は言われましたけれども、安心あんじんは私自身の問題であるという点は重要だと思いません。日本に仏教が伝来してから、仏教

が持つ社会的機能というのは、奈良時代においては国家護持でした。国家の安寧、国家秩序の安全のための仏教だったわけです。管理のツールとしての仏教であったのが、鎌倉時代になって、安心は私自身の問題であると変化していくわけです、この変化は革命的だと思いません。

このことは、近代的な人間観を非常に早く先取りしているとすら言うことができます。鎌倉時代、親鸞聖人が生きた時代の二〇〇年後にヨーロッパでは宗教改革が起こります。マルティン・ルターら宗教改革者が「信仰は私の問題である」とほとんど同じことを言う。そういう点では浄土真宗の先駆性というか、世界史的な視点で見ても非常に先駆的な人間観を持つているので、ここの部分は徹底してこだわり抜くべきだと、私は今回感じました。

○徳永 先ほども言いましたけれども、浄土真宗の教学の中心は、行信論と言い

まして、念仏、信心というのは阿弥陀さまとの関係ということにこれまで議論が集中されてきた。ところがこのコロナの問題が起こりましてから、横の広がりというのをどうしても考えざるを得ない。今日の議論もそういうところで非常に裨益するところが多かったと感謝しております。

○藤丸 今回、個人的に重要だと感じられたのは、利他の関係性をあらためて考え直すきっかけが、コロナ禍で浮かびあがっていることです。仏教語なものですから、ゆがめられている自業自得論と私は申しあげたいんですけども、すごく大きな課題として、浮上してきておりますので、そのあたりを今後の課題にしていきたいと思いました。

## 閉会 座長あいさつ

総合研究所 所長

丘山 願海

私ども宗門が取り組んでいることの  
一つに、「伝える伝道から、伝わる伝  
道へ」ということがあります。私はそ  
のことを考えながら先生方のお話を聞  
いていました。

そういう中で結論的に言うと、キー  
ワードは双方向性だと思っています。  
これは松尾先生が指摘なさっていた一  
緒性も同じだと思っています。真宗の  
お話でもいろいろ、仏教の話でもい  
い、さらには生き方そのものから共に  
考えていく。一緒に考えていく中で、  
真宗にうつなっていく。それは、双方

向性なのではないかなと思いました。

それから、やはり大事なものは共感だ  
と思っています。共感というものは一  
方向では成り立たない。閉じられた中  
での共感では駄目だということです。

今、世界的に、政治的にも、経済的  
にも、独善的なあり方、あるいは排他  
的なあり方が世界的な流れで起こって  
いると思います。そのとき、共に生き  
るといふことで、正反対の方向に向か  
わせるのが、私たち仏教の、あるいは  
宗教者の役割だと思えます。

それから利他は、特に紀元一世紀頃

から登場してきた大乘仏教において強  
調されています。ただ、今の世界では  
伝統的な利他、自己犠牲の上に成り立  
つ利他というのは、なかなか伝わって  
いきません。あるいは、私たちの関係  
にはなかなかしっくりこない。また、  
サンスクリット語で自利といふこと、  
「svārtha」、自己の利、利益です。利  
他といふのは、「parārtha」、他者の  
利益なんです。この「アルタ(artha)」  
利益が自と他では対立するの。ある  
いはうまく調和していけるのか。そこ  
はあらためて、根源的に問わなければ  
いけないのではないかと思っています。  
す。

今日は先生方、ありがたうございま  
した。